

亜希子

有森 信二

車を降り、波打際まで歩いた。砂が深く、一足毎に靴底に絡みついてくる。波打際は月の光を吸って、深緑色に沈んで見える。そのまま水際に沿って歩き、打ち上げられた木切れを見付け、腰を下ろした。

ポケットから煙草を取り出し、マッチを擦った。マッチは、炎を結ぼうとしたが、乾いた小さな火花を散らしてすぐ消えた。二本目のマッチを擦った。左手で覆いをつくり、芯が燃え上がるのを待つて火を点けた。深々と肺の奥まで煙を吸い込んだ。押さえの効かなかった身内の興奮が、その一口でいくらか落ち着いたと思った。

亜希子の首を絞めたのだ。なぜそんなことになったのか、自分でもよくわからない。亜希子の家の灯りの見える三叉路まで来たとき、ぼくは激しくハンドルを切り、雑木林の入口に車を突っ込んだ。そして、亜希子を見た。そのままだったら、ぼくは亜希子の唇を盗んでいただけだったろう。しかし、亜希子の目の中に、一瞬困惑の色が走ったのを見

逃さなかった。「達也さんにはお世話になりました」というもいふときの亜希子が、やっぱりそこにいた。

ただそれだけのことで、ぼくの指は亜希子の唇をすべり、喉元に食い込んでいた。亜希子は抗いもせず、目を閉じ、ぼくの指に力が込められていくままにまかせていたが、亜希子が崩れ落ちるより先に、ぼくの方が萎えてしまった。大きく息をして体を起こすと、亜希子ははだけかけた胸元をつくろい、足元に落ちたバッグを拾って、静かにドアのロックを外した。そして、ゆっくりドアを開けると、白いブラウスの後ろ姿をバッグミラーに映し、三叉路の方へ去っていった。

半月ほど前、東京に住む兄の達也から、社内での新しい交友を知らせる手紙が届いた。ハイウェイをドライブしたときのものか、スポーツカーをバックに、揃いの水色のシャツを着て、頬を寄せ合っている写真が入っていた。

亜希子は達也が大学三年のときに同じ関東の短大に入り、二年前に英文科を卒業したが、母が一時体調を壊していたという事情もあり、福岡の英語講師の職を求めた。

ぼくは地元福岡の大学を出て、地場の銀行に入ったばかりである。高校では、一緒の学年ではあったが、別々のクラスだったぼくと亜希子の間に、特別の感情などなかった。というより、ぼくは高校時代の亜希子のことを、殆ど思い

出せない。

「達也さんにはお世話になりました」羞恥を体中に露わにし、亜希子の方から近付いてきた。福岡に残った四十数人が、クラスを越えて開いた同窓会の席であった。在学中は、達也と同じ横浜の、隣の区に住んでいたという。

同窓会以来、ぼくたちは機会をみて会うことになった。亜希子の勤める中学校から一駅ほど歩いた公園の駐車場を待ち合わせの場所にし、食事をしたり、映画を観たり、あてもなく車を走らせたりした。亜希子の好きな野草を探しながら、一日中山道を歩いたこともある。

しかし、ぼくたちの間には、いつも達也がいた。写真のネガが被さる恰好で、亜希子の笑顔の奥にいつかさうっとしのび込んできたり、亜希子の肩に手を伸ばそうとするぼくの鼻先に、ふいに絡みついてきたりした。

今朝の電話は亜希子からだった。「仕事を辞めて上京します」と、低い静かな声でいった。やっぱり達也のことが、と口に出しかけたぼくに、亜希子は、かねてから話していた四年生学部へ編入学する決心を固めたのだ、といった。

一週間前から会う約束をし、南九州方面へのドライブをすることにしていた。目的地は定めないといいながらぼくたちの流儀であったが、日を越えることがないうちに亜希子を家に送り届けることが習いになっていた。

太宰府インターのあたりで、直進の熊本、八代方面に向かうか、左の大方方面に向かうかの選択を亜希子に委ねたが、答えなかった。気が付くと、ぼくは百キロを超えるスピードで熊本、八代方面に向け高速道をとぼしていた。東京から、一キロでも二キロでも遠ざかりたいのだった。

亜希子は無言だった。ぼくも無言だった。

遅い昼食をドライブインでとったとき、「ぼくが達也になることはできないのだろうか」と、胸の底にずっと溜めていたことばを一気に吐き出した。亜希子は、西日の当たる頬にわずかに赤味を帯びた微笑を浮かべ、庭の泉水が次々に生み出す水の輪を、まぶしそうに見詰めていた。

遠く見下ろせる海には、岬の鼻を抜け、外海に向けて進んでいく船が見えた。船は止まっているのではないかと思えるほどのろさで、そのくせ確実に岬を離れていった。

亜希子は岬を離れる船に目を移し、「編入学の合格通知がきたの」といったのが最後で、帰りの車内でも目を正面に向けたままだった。白いブラウスの胸は、呼吸を止めてしまったのではないかと思われるほどに秘やかだった。

潮風が、煙草の灰を吹き散らした。ぼくは最後の一口を深々と根元まで吸うと、波打際に向かつて立った。なにかが囁きかけていやしないか。それを激しく聞きたかった。波間に向かい、ぼくは吸い殻を力いっぱい投げた。